

## 最優秀賞

# 3028 グラムの奇跡

奈良市立富雄第三中学校 3年 丸山 ひなの

「命は大切。」私はこれまで、何度もこの言葉を聞いてきました。しかし、その言葉が持つ本当の意味を深く考えたことはありませんでした。私が命の重みを初めて実感したのは、小学校3年生の夏です。

当時、私の家族は母、父、弟、そして私の4人家族でした。母はもう一人、家族を迎えるために、不妊治療を続けていました。思うように結果が出ない中でも治療を続けていた母がある日、嬉しそうに妊娠検査薬を見せてくれました。家族みんなで喜び、それからはエコー写真を見ることが何よりの楽しみになりました。少しずつ成長していく赤ちゃんの姿を見るたびに、「早く会いたい。」という気持ちは大きくなっていきました。

しかし、その幸せは突然失われました。夏休みのある朝、母が苦しそうに息を切らしていました。床には液体が広がり、母は震える声で、

「破水したかもしれない。」

と言いました。その時、まだ妊娠5か月でした。家族で病院へ向かいました。病院では弟と二人で待ちながら、「母も赤ちゃんも無事でいてほしい」と祈り続けました。しかし、私にできることは、ただ待つことだけでした。不安で胸がいっぱいになり、何もできない自分がとてももどかしかったことを覚えています。しばらくして戻ってきた両親の表情を見た瞬間、私は何か良くないことがあったのだと感じました。帰りの車の中で、父が赤ちゃんが助からなかったことを静かに話してくれました。その子は、私がずっと会える日を楽しみにしていた女の子でした。これから一緒に生きていくはずだった妹が、もういない。私はその事実を受け止めることができず、涙が止まりませんでした。数日後、火葬場で初めて妹と対面しました。小さな妹の姿を見た瞬間、胸が締めつけられました。その姿を前に、一つの命には多くの願いや愛情が込められていることを知り、命の重みを初めて実感しました。

それからしばらくして、母はもう一度赤ちゃんを迎えたいと決意しました。悲しみを抱えながらも前を向いて努力を続ける母の姿を見て、私も赤ちゃんが無事に生まれることを願いました。そして、2022年10月11日。待ち続けていた妹が元気に生まれました。出生体重は3028グラムでした。病院で初めて妹を見た時、小さな体で懸命に生きる姿に自然と涙がこぼれました。妹を一度失った私にとって、目の前にいる小さな命は、決して当たり前前の存在ではありませんでした。今、妹は3歳になり、毎日元気いっぱいに笑っています。妹の成長を見守る中で、私は改めて、何気ない毎日や家族と過ごす時間も決して当たり前前のことではないのだと思います。

あの日から、私は「命がある」ということの本当の意味を考えるようになりました。以前の私は、「命は大切」という言葉を、自分自身のこととして考えたことはありませんでした。しかし、この経験を通して、命があることは当たり前前のことではなく、今を生きていること自体がかけがえのないものなのだと知りました。私にとって3028グラムという数字は、ただの出生体重ではありません。それは、私達家族が待ち続けた命の証であり、命の尊さを教えてくれた「奇跡」の重さです。私は、自分や家族だけでなく、周りにいる一人一人の存在も大切にしたいと思うようになりました。支えてくれる人への感謝を忘れずにいたいです。また、ただ祈ることしかできなかったあの日の経験があるからこそ、今度は私が、誰かの苦しみや小さな変化に気づき、その人のそばで話を聞いて支えられる人になりたいです。3028グラムの命が私に教えてくれたことを忘れず、これからも一つ一つの命を大切に生きていきたいです。